

稲こうじ病の発生した稲発酵粗飼料（WCS）の扱いについて

1 WCS用イネでの稲こうじ病の発生

WCS用稲栽培では、生産コスト低減のため、耕畜連携による堆肥活用による多肥栽培が求められます。稲こうじ病は糸状菌による病気で多肥条件下で発生しやすい特性があり、広島県においても、年次や場所により発生が目立つことがあります。

収穫期に粃に黒い団子のようなものが付くことから、発生程度により、WCS用イネではクレームにつながり販売上の阻害要因となります。

2 稲こうじ病が発生した稲発酵粗飼料（WCS）の家畜への給与について

稲こうじ病の発生したWCS用イネで、ホールクロップサイレージ（WCS）を調製し牛などへ給与する場合、次の点に留意する。

- ① 稲こうじ病の発生の程度によるが、罹病稲のWCSは嗜好性の低下が見られる。
- ② 家畜への影響について、通常のWCS給与量（現物8～10kg/頭）では、牛などの健康への問題は見られない（平成19年度広島県立総合技術研究所畜産技術センター年報より）。

3 稲こうじ病の発生生態と防除について

(1) 稲こうじ病の伝染源

病粒中に含まれる厚壁胞子が地表へ落下して越冬し、翌年の伝染源となる。移植された稲の根や生長点に厚壁胞子が発芽して感染し、稲の生長点付近に存在して幼穂に至ると考えられている。

(2) 発病条件

出穂前の10～20日間に降雨が多く気温が低い場合、発生が多くなる。

出穂の遅い品種や晩植栽培、窒素肥料の多量施用、日陰地等での栽培等で発生が多い傾向にある。発生ほ場では伝染源である厚壁胞子が越冬するため、発生ほ場では翌年も発生しやすくなる。

(3) 防除対策

窒素肥料の遅効きで発生が助長されるため、適正な肥培管理に努めることが大切である。常習的に発生が見られる場合、出穂20～10日前に薬剤防除を行うと効果的である。